

【研究ノート】

地域創生コースについて

筒井 琢磨

A research note on the Region Revitalization Course

Takuma TSUTSUI

皇學館大学現代日本社会学部

日本学論叢 第11号

令和3年3月

【研究ノート】

地域創生コースについて

筒井 琢磨

抄録 ●

本学部の地域創生コースでは名称変更はあったが、学部開設以来、フィールドワークを重視する教育方針を通してきた。フィールドワークは現場を知る教育機会であると同時に、地域社会と自己の関係性を考え始める重要なきっかけとなる。地域社会と自己の関係性に気づくことによって、さらなる研究テーマが見えてくる。

本稿は2つの研究テーマの可能性を指摘する。1つ目は地域性、ローカリティの探求である。グローバリゼーションとの関連でローカリティの重要性はますます大きくなってきている。2つ目は地域アイデンティティの追求である。シンボリック相互作用論の視点を採用すれば、地域社会における相互作用は地域アイデンティティと自己アイデンティティ両方の変革をもたらすものである。

Key words : フィールドワーク グローバリゼーション ローカリティ
地域アイデンティティ 自己アイデンティティ

はじめに

平成22(2010)年4月に現代日本社会学部が開設されて10年が経った。また、地域創生コースが設置されて2年が経過しようとしている。このコースの前身である現代社会分野(平成22～24年度)3年間、地域社会分野(平成25～30年度)6年間も含めて振り返ってみると、分野名やコース名の変更はあったが、このコースでの学びや研究には一貫したものがあると感じている。本稿ではこれらについて思うところを簡単に記したい。

1 地域創生コース設置の経緯

現代日本社会学部開設時は4分野（政治・経済分野，現代社会分野，福祉計画・社会福祉分野，伝統・文化分野）があり，分野の下にコースを置いていた。政治・経済分野には政治・経済コースの1コース，現代社会分野には地域社会コース，社会臨床コース，社会情報コースの3コース，福祉計画・社会福祉分野には福祉計画コース，社会福祉コースの2コース，伝統・文化分野には伝統継承・文化創造コースの1コース，合計4分野7コースを置いていた。現代社会分野は「国土・郷土現場を知るフィールドワークを重視し，徹底した調査・分析からさまざまな諸問題を解決へと導ける人材を育成」¹⁾することを教育目的としてきた。「現場を知る」という「フィールドワークを重視」することが現在の地域創生コースに至る重要な教育方針の柱である。このことは，学部開設以来，この分野・コースは社会調査士²⁾養成課程という位置づけをしてきたことに由来する。

現代日本社会学部という学部名称と現代社会分野という分野名称が似ているため，4分野制設置の意図が対外的にわかりづらいことは当初から指摘されていた。この分野名称はもともと，開設時の専門科目カリキュラムが「現代社会」，「社会福祉」，「伝統・文化」の3区分に整理されていたことに由来するものである。「現代社会」カリキュラムに政治・経済分野科目群と現代社会分野科目群が置かれていたため，政治・経済分野はカリキュラム区分上にその名称がない状態だった。そのため，完成年度を待って平成26年度カリキュラム改定によって，専門科目カリキュラムを「政治経済」を入れた4区分に区切り直すことが予定されていた。また，開学部3年目にはすでに，「現代社会分野」は将来的に「地域社会分野」に改称するよう，当時の学部長宮川泰夫教授から指示があったので，カリキュラム改定の1年前倒しで4期生からは地域社会分野として教育指導に当たることになった。

平成26年度カリキュラムでは専門科目カリキュラムが「政治経済」，「地域社会」，「社会福祉」，「伝統文化」の4区分に整理され，分野の名称と一致した。また，コースは置かなかった。このカリキュラムでは，地域社会分野はフィー

ルドワークを重視し、調査・分析を行って「地域社会の」諸問題を解決へと導ける人材を育成することを教育目的として継承した。旧来の現代社会分野ではフィールドとして地域社会だけでなく、様々な社会領域（例えば、産業、医療、教育等）を想定していたが、地域社会分野では対象となる社会領域を「フィールド」の原義である「地域社会」に特化することで、各分野の教育特色を明確化したことになる。

地域社会分野の「フィールドワーク」重視の教育方針の追い風となったのが、平成26年度から全学において5か年計画で採択された大学COC事業『『伊勢志摩定住自立圏共生学』教育プログラムによる人材育成』³⁾である。本学部のフィールドワーク機会としては専門科目カリキュラム内に正課教育として実習科目（「産業社会実習」, 「社会臨床実習」, 「社会情報実習」, 「社会調査実習」）を配置して臨み、課外活動としては学内学会である現代日本学会に研究部会⁴⁾を置いて「地域社会研究会」などの活動機会を提供し続けてきたが、この大学COC事業によって、より充実したフィールドワーク機会を学生に提供できるようになった。本学の大学COC事業は平成30年度で終了したが、共通科目における伊勢志摩共生学カリキュラムや副専攻制度は継続され、課外活動のメインになるCLL活動⁵⁾は継続・発展を遂げている。

平成31（2019）年度カリキュラム改定によって、4分野は現行の4コースになった。すなわち、経営革新コース、地域創生コース、福祉展開コース、文化発信コースである。それまでは本学部のみ、全学で用いられている「コース」を使わずに「分野」を使っていたので、このカリキュラム改定に合わせて全学で「コース」に統一したのである。本学部の専門科目カリキュラムの科目区分名もコース名に変更した。

地域創生コースへの名称変更に伴い、英語表記も変更された。「地域社会分野」はRegion and Community Divisionだったが、「地域創生コース」はRegional Revitalization Courseである。

「地域社会分野」の英語表記は「地域社会学会」Japan Association of Regional and Community Studiesに由来していた。regionとcommunityを並列するこの表記は実は、「地域社会」を学術的にどのように定義するのかという、この

学問領域において根本的な問題を内包している。

「地域創生コース」の英語表記はまち・ひと・しごと創生法（平成26年11月公布）に基づく「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（いわゆる地方創生戦略⁶⁾）に由来する。この総合戦略パンフの英語タイトルが *Regional Empowerment for Japan's Growth* であり、また、サブタイトルが *Overcoming Population Decline and Revitalizing Local Economies: Japan's Long-term Vision and Comprehensive Strategy* とされている⁷⁾ので、「地域」は region, 「創生」は revitalize に基づくと考えられる。「創生」が vitalize でなく revitalize であることに留意したい。つまり、新しく生み出すという意味よりも蘇らせる、「再生」するという意味が込められているのである。

2 フィールドワーク重視の意義

地域社会に貢献する人材となることを目指す学生には、4年間の大学生活の中で早めのうちにカリキュラム内外のフィールドワーク経験を得ることを勧めたい。フィールドワーク経験は、デスクワークだけでは望めない学修成果を得る教育機会になるという一般的な見解に加えて、本稿ではフィールドワークの意義についてもう1点指摘しておきたい。

フィールドワークのもう1つの意義は、究極的にはそれが自分を見つめ直すきっかけになることである。「地域社会」体験の実態は、そこで出会う人々との関係性である。映画館で映画を鑑賞したりする体験とはまったく違う。自分の目の前にいる地域の人々が自分に接し、自分に話しかけてくるのである。一人の人間として自分はその人々に何らかの反応をせざるを得ない状況に置かれていることを実感する場がフィールドである。多くの地域の人々は学生を「学生」として接してくれる。CLL活動の趣旨を理解されたうえで話しかけてくださる。作業がうまく進まなくてもアドバイスをしてくださったり、手助けしてくださったりする。しかし、そのうちに、自分が試されていることに気づくことがある。地域で暮らす人々は自分たちが自分の地域で暮らしている時と同様、何らかの目的をもって自分たちを含めた様々な人々と関わっている。CLL活動の場合は目的がはっきりしているので、それに応える活動成果が参

加する学生に求められていることは比較的理解しやすいが、活動成果といってもその達成度は自分の能力次第で変わってくる。「この学生さんならこの程度のことはやってくれるだろう」など、地域で活躍されている人々は目利きの方が多い。何気ない言葉のやり取りの中で実は私たちは評価（または値踏み）されているのである⁸⁾。そのことに気づくとき、自分にとって地域社会がどのような意味を持つのか、真剣に考える必要があるのである⁹⁾。地域社会という圧倒的な生活の現場の前に無力な自分がたたずんでいることに気づくことが自分を見つめ直すきっかけになる。

地域社会に貢献するということが自分にとってどういうことなのかを問い直される必要があるのだ。

3 ローカリティの探求

地域社会のことを学ぶことの意義として、本稿では2点指摘したい。1点目は地域性の重要性に気づくということである。地域性とは、その地域社会の個性や独自性のことを指す。この意味ではローカリティ locality という言葉がよく使われる。地域性は都市部から見た地方の魅力という意味（都市－地方の対比）や、中心から遠い地である周縁の特殊性（中心－周縁の対比）などという意味ではない。ローカリティに対比されるのはグローバリゼーションである。国際化 internationalization という語は国家 nation の存在を前提とするが、グローバリゼーション globalization は地球 globe 化であり、国家を超えて地球規模で主に経済活動等が進行する状況を表す。グローバリゼーションとローカリティについて様々な議論がある。例えば、玉野は次のように述べる：

…(このような意味での)世界的な広がりが生まれてくるにつれて、かえって個々の地域のもつローカリティが注目されるようになっている。なぜなら国家の経済的な単位としての位置づけが変化することで、個々の地域は世界の他の地域との直接の競争にさらされることになった。それゆえに、より広い文脈においてそれぞれの地域がその個性を主張して差異化をはかる必要が出てくる。

(略)

同時に、そのような地域の独自性こそがグローバルな世界経済において付加価値の高い商品を継続的に開発し、提供する能力を基礎づけていることが注目されるようになった。

(略)

(このように) グローバリゼーションのなかでのローカリティへの注目という事実は、言語や文化の違いをこえて人々が理解し合えるのは、あくまで差異をもった特殊な形態を通してのみであること、したがってそのような多様な形態の特殊性を維持してのみ、グローバリゼーションは成立しうることを示している。¹⁰⁾

玉野はグローバリゼーションとローカリティの同時進行を「グローカリゼーション」とも言い換えている。経済活動が国家の枠を超えてしまった現在の状況では、ローカリティは国内の狭い範囲での地域社会間競争の文脈（地方の魅力を都市部に訴えて移住促進を競い合うなど）ではなく、一つ一つの地域社会が全世界のプレーヤーと対等な立場で渡り合うために求められる特殊性をグローバル経済の文脈で語られなければならないのである。ローカリティの探求は、グローバリゼーションの進行に伴って迫られる対応というよりも、グローバリゼーションの進行を支える重要な取り組みと言えよう。

4 地域アイデンティティの追求

地域社会のことを学ぶことの意義としての2点目は地域アイデンティティの重要性に気づくということである。地域アイデンティティについては、いわゆるC I（企業アイデンティティ, corporate identity）と同じような意味で捉えている。企業が組織や集団として一体感を保つこと、またはその同一性を維持するための様々な取り組みのことをC Iと呼ぶが、地域についても同様な取り組みが存在するであろう。自他の区別を明確に意図的につけることがローカリティの探求にもつながる。

地域アイデンティティについてはもう1つ注目すべき観点がある。フィール

ドワーク重視の意義の項で述べたが、フィールドワーク体験は自分という存在をあらためて考え直すことに結びつく。地域社会の人々との相互作用の中で地域で生じる様々な事象が持つ意味内容が生み出されていく。「地域」という記号（シニフィアン）に胸躍らせてフィールドに飛び込む学生や研究者が取得する意味内容（シニフィエ）は地域という空間ではなく、また、意味を受動的に受け止めるわけではなく、地域の人々との相互作用の中で、その時、その場で、意味創出の当事者として関わるのである¹¹⁾。そして、新たなシンボルや意味の創出は、必然的に自己定義にも影響を与える。新たなシンボルや意味は、自己の構成要素としてのシンボルや意味にもなり得るのである¹²⁾。このように考えると、地域アイデンティティの追求は自己アイデンティティの変革に結びつく。そして、おそらく、地域アイデンティティの追求には、自己アイデンティティの変革を恐れない人間が必要になってくると思われるのである。「地域」も「自己」も自ら「構築」するのである。

おわりに

フィールドワーク体験の楽しみは、まず「異文化体験」の機会であることから生じるものであろう。また、地域社会をフィールドにする時、自分が見慣れているはずの地域社会について、それまでまったく気づかなかった現実を知ることには、「異文化体験」以上の衝撃を感じるかもしれない。その段階で終わってしまうことも多いが、次の段階に進むと、また別の景色が見え始める。当事者しか見えない景色である。ローカリティの探求も地域アイデンティティの追求も、おそらく「当事者」意識を持って初めて関わりが生じるものであろう。当事者意識と並んで地域活動に求められるものは持続可能性である。持続可能な活動の取り組みが当事者意識を育て、当事者意識が地域活動を持続可能にするのである。

地域社会に貢献する人材となることを目指す学生は、マラソンランナーのような感覚で、知的好奇心を持って現場を楽しみながらも息長くフィールドワーク¹³⁾ 経験を積んでいてもらいたい。その経験が生涯にわたる財産となるに違いない。

註

- 1) 皇學館大学『平成23年度大学案内』
- 2) 「社会調査士」は一般社団法人社会調査協会が発行する資格の名称である。この資格は本協会によって認定された社会調査士指定科目（選択必修科目も含まれる）の単位取得後、大学卒業時に申請し、卒業後に付与される。在学中には指定科目のうち、所定の単位数取得と科目数履修の条件を満たせば、「社会調査士キャンディデイト」資格取得が可能である。本学は平成17（2005）年度から社会調査士養成課程を置いている。当初は現代日本社会学部の前身である社会福祉学部の社会情報コースにこの課程を置いていた。
- 3) 大学COC事業とは、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」である。本学の事業は、三重県伊勢市を中心市として「伊勢志摩定住自立圏」を形成する3市5町（伊勢市、鳥羽市、志摩市、度会郡玉城町、度会郡度会町、度会郡大紀町、度会郡南伊勢町、多気郡明和町）の自治体と連携し、地域の定住機能の新たな在り方を自らの課題として捉え行動できるアクティブ・シチズンの育成するためにカリキュラム改革・学士課程教育の質的転換を図ることを目的とした。本学ホームページ『伊勢志摩定住自立圏共生学』教育プログラムによる人材育成』<https://www.kogakkan-u.ac.jp/cooperation/coc/>を参照。
- 4) 地域創生コース関連の研究部会は現在、地域社会研究部会、茶業研究部会、大学生SBP研究部会の3つである。
- 5) 伊勢志摩定住自立圏を中心とする三重県内のフィールドで地域課題解決を体験的に学ぶ機会であり、自治体等の実施主体が取り組む地域課題の解決に向けての事業に本学学生が参加する学修プログラムである。単位認定はされないが、学長名で「地域貢献活動時間証明書」が発行される。本学ホームページ「CLL(Community Learning Labo)」<https://www.kogakkan-u.ac.jp/cooperation/coc/cll/>を参照。
また、CLL活動参加は本学副専攻「伊勢志摩定住自立圏共生学」の修了認定条件の1つである。

- 6) この政策が始まる経緯については増田寛也『地方消滅－東京一極集中が招く人口急減』中公新書, 2014年を参照のこと. なお, 本書を地域創生コースの基本文献としている.
- 7) 内閣官房・内閣府「まち・ひと・しごと創生本部」総合サイト「地方創生」<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/> を参照.
- 8) 日常生活において普通に生活している人間が互いに評価を加えていることはとくに地域社会に限ったことではないことは, 例えば, 次の文献を参照のこと.
E.ゴッフマン『行為と演技－日常生活における自己呈示』誠信書房, 1974年.
- 9) 「値踏み」されるのは学生だけでなく, 行政職員や大学教員を含めてあらゆる関係者も同様である. やっかいなことに, 「値踏み」されていることは後で気づくことが多い.
- 10) 玉野和志「グローバリゼーションとローカリティ」『新版キーワード地域社会学』ハーベスト社, 2011年, 202-203頁.
- 11) シンボリック相互作用論の考え方に基づく. たとえば, ハーバート・ブルーマー「シンボリック相互作用論の方法論的位置」『シンボリック相互作用論』勁草書房, 1991年, 1-77頁.
- 12) 構築主義論的自己論の考え方に基づく. たとえば, 片桐雅隆『自己と「語り」の社会学』世界思想社, 2000年.
- 13) 本学は3年次生の演習科目の実地学習の機会として「フィールドワーク」を設けているが, 本稿の「フィールドワーク」はそれを指すのではなく, 一般名詞として用いている.

【Research Notes】

A research note on the Region Revitalization Course

Takuma TSUTSUI

Abstract

Our faculty sets four courses in our curriculum. One of these is the Region Revitalization Course. In this curriculum course, we expect students to experience field works at their local regions.

From those field work experiences, we want students to study two academic research themes.

One theme is the exploration of locality. As related to globalization, globalization depends on various characteristic localities of many local areas of all over the world.

Another theme is the inspection of local identity. In field work experiences at local regions, we feel parallelism between self identity and local identity. We create new meanings and symbols through interactions with local people. Then, those meanings and symbols create both our self identities and our local identities.

We must have two important concerns when we start our local activities. One is that we are there initiatively. Another is that we should continue our activities like a marathon runner.

Key Words : field work globalization locality local identity self identity